

大阪府内の高校における「語り合い」の実践

—コロナ禍を生きる卒業間近の高校生が感じていたこと—

小田 歩*

ODA Ayumi

1. はじめに

生活様式が変わって2年、人との物理的距離が遠くなったことにも慣れてしまった人も多いかもしいない。筆者が2021年に受け持った学年の生徒たちは、高校2年生の初めから一斉休校や行事の中止を経験し、どこか諦めムードが漂うようにも感じられていた。そんな中で、この「現社クローズアップ」という授業では、最新ニュースを扱いながらも、自分や周りの人々を大事に、という願いを込めてテーマを選び、進めてきた。生徒はこちらの提示するテーマに真剣に向き合っていたので、卒業前には、このメンバーで「語り合い」をできたらいいなという思いを温めてきた。

「語り合い」とは大阪大学大学院人間科学研究科の千葉泉先生が実践されている授業であり、4人程度の少人数グループで、自分について参加者が語り合うというものである。筆者は以前この語り合いに参加させていただいたことがあった。

しかし、いざ時期が近づくと「受講生のモチベーションが大学とは違う高校の授業でうまく行うことができるのか」「千葉先生のお人柄があってこそ、意義ある語り合いができるのではないか」「ファシリテートにはどのようなことを意識すれば良いのか」など不安や疑問が次々と浮かんできた。そこで、勢いで千葉泉先生に相談メールをお送りした。するとゼミの時間に快く受け入れていただくことになり、ゼミ生のみなさんからのアドバイスの助けもあり、実行に移すことができた。

本稿では、まず、実践の流れを示し、次に、実践後に得られた生徒からの振り返りを考察し、今後への展望について触れることとする。

* 大阪府立渋谷高等学校教諭；ayumioda922@gmail.com

2. 本実践の目的

この授業を高校で行う目的は「生徒が自分の経験や気持ちをできるだけ躊躇せずに、思い切って外に出すことによって、自分自身のことをよりよく理解すること、そして『聞き手』が『語り手』のことをより深く理解できるようになること」であった。普段授業で生徒たちと向き合う中で、「毎日一緒に過ごしているクラスメイト同士でも、もしかしたら本当に話してみたいことは話せずに卒業を迎えてしまうのではないか」、という思いが強くなっていった。自分の毎日を振り返っても、周りにいる同僚などの人々と、互いの経験や気持ちを共有できているだろうかと思うと、自信をもって「できている！」とは言えなかった。この3年間は、人との距離を意識するあまり、いわゆる「無駄話」が良くも悪くも急激に減ってしまった実感がある。もし同じことが生徒にも起きているとすれば、同年代の友人と言葉を交わす財産となる時間を過ごし損ねることになっているのでは、という危機感を抱いていた。この「語り合い」の時間を設ける動機としてはこういった状況を改善するために何かしたいという気持ちも大きかった。

3. 本実践の位置づけ

「現社クローズアップ」は高校3年生向けの授業である。卒業後の進路が多岐にわたる本校で、全員が今後生きる上で考え続けてもらいたい内容を吟味し、1年を通して、最新ニュースや、コロナ禍の社会、精神疾患の動向、性の多様性、幸せな働き方などについて扱ってきた。また、世界の動きやニュース・他者の意見に対して「あなたはどう思うか」ということを文章化し、互いに読んで意見を交換する「サイレント・ダイアログ」に多くの時間を割いてきた。従来はグループになって対面で話し合う、という形が主流だったようだが、それができない状況を逆手に取り、勢い任せでなく、じっくり考えて言葉を紡ぐ時間が取れたという実感がある。そのような実践を続ける中で、卒業直前だからこそ人に話せることもあるのではないかと、という考えに至り学年の最後にこの実践を設定した。本授業を受講する高

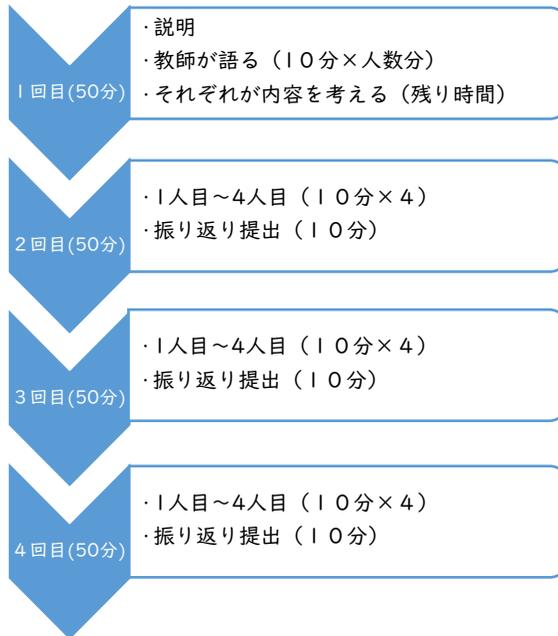


図1 授業の進め方

校3年生3クラス(1クラス34~35人)を対象に、2021年12月~2022年1月にかけて実施した。授業の進め方は、1回目に概要説明、筆者を含む教員による語りの実演の後に、生徒たち自身が語りの準備をした。2回目以降は、生徒たちが実際にグループで語り合いを行い、最後に振り返りを提出する、という流れをとった(図1)。

4. 授業内容

4.1 オリエンテーション(1時限目)

まずPPTで授業の流れや目的を説明した。事前に「周りの人に、普段は聞きにくいけど聞いてみたいこと、話題にしてみたいこと」というテーマで題を募集したところ、以下のような答えが集まっていた(図2)。

恋バナと黒歴史	暇な時間はみんな何をしているのか	誰にも言っていない話があるか	どんなクセがあるか
失恋した時の立ち直り方	イラッとすること	何を考えて生きているのか	悩み相談
将来の仕事	趣味	やる気がない時の対処法	ストレス発散法

図 2 生徒に提示した話題例の一覧

これらをもとにテーマを「自分について」と広く設定した。条件は①A4サイズの紙に何かを書いてそれを見せながら話すこと、②傾聴すること、③守秘義務を守ること、の3点に絞って伝えた。

目的については、「自分の経験や気持ちをできるだけ躊躇せずに、思い切って外に出すことによって、自分自身のことをよりよく理解すること、『聞き手』が『語り手』のことをより深く理解できるようになること」という文章を示した。

生徒は、これから始まるのがすぐにはイメージできない、という様子で、周りをうかがっているように見えた。説明の後で筆者が自分について語ることにした。今まで何十回も同じ教室で授業をしてきたにもかかわらず、自分のことを話すとなると頭が真っ白になる瞬間が度々あり、ここ数年のつらかった時期に差し掛かると、涙がこぼれた回もあった。それでも生徒は茶化すことなど一切なく、真剣にこちらを向いていた。

実践が行われた3クラスのうち、2クラスでは、筆者以外の教員にも語りを依頼した。あるクラスでは担任に、他のクラスでは学年主任と生徒指導部長にもお話しいただいた。3名全員が生徒と3年間深く関わってこられた教員であり、生徒たちが食い入るように前を向いていた姿が印象的であった。

生徒の感想を見ても「感動した」「聞き入っちゃった」「心に刺さりました」「濃かった」「意外だった」「私も頑張ろう」「とってもいい先生」など絶賛の嵐だった。

4.2 生徒による実践（2 時限目以降）

4 人 1 グループとなり、特にリーダーなどは決めずに行った。冒頭の説明は最小限に抑えたが、「傾聴」と「守秘義務」については毎回必ず触れた。

4.2.1 語り手の生徒

生徒が語る 1 回目の授業では、準備をしてきた生徒と、自信がない生徒との二極化が起こっていたように感じた。A4 用紙いっぱい、幼少期から今までを折れ線グラフで表現する生徒、文章で書く生徒、書きかけで持ってきた生徒など、用紙の使い方もさまざまであった。しかし、どのような場合も、5 分以内には一旦語りが一段落し沈黙が続く、という場面が見られた。質問などが続く場合もあったが、困っていそうなグループにはこちらが「もう終わった？」と聞いてしまったことも何度かあった。「もう話すことない」という返事が返ってくることもしばしばあった。そこでいくつかのグループには「こんなことを聞いてみてはどうか」などと代わりに質問をして回った。

4.2.2 聴き手の生徒

「話すことない」というグループがある一方で、ひたすら盛り上がるグループ、静かに話が続くグループも多く見られた。こうしたグループには「へー！」「すごーい！」「しらなかったー！」といった相づちを絶妙なタイミングで打つ生徒がいる場合が多かった。また、派手ではなくても「きちんとあなたの言葉を聞いていますよ」ということを目で示したりするメンバーがいるように感じられた。話しやすい空気を全身で作ろうという雰囲気はそこにはあった。

4.2.3 気持ちの乗らない生徒

授業で行う以上、全員参加が大前提であったが、やはりあまり乗り気ではなく机に突っ伏してしまう生徒も見られた。しかし、筆者が強制的に身体を起こすということはしなかった。周りの生徒もその生徒を気遣ってか、無理に参加させるということはしていなかった。語り合いは 3 回予定していたので、心身の調子が悪いときは無理をすることはしないし、「やりたくない」その気持ちも大事にした上で、その理由をレポートに書いてもらえればよいと考えていた。実際に、ある生徒は 1 度も顔を上げ参加することはなかったが、後日のレポートでは「他の人が話していて、みんなで楽

しように自分のことを話していて、すごいなと思いました。自分が話したことに反応してくれたり話を聞いてくれたりするの、多分嬉しいことなんだと思った。」と振り返っていた。

4.3 実践者の迷い

4.3.1 グループのメンバー

事前にグループメンバーを発表しておくことで、「誰と一緒にいるんだろう」という不安を少しでも和らげることを試みた。しかし、欠席者がいると急遽変更したこともあったので、それで緊張してしまった、という声も聞かれた。また、「前回と同じ人がいる場合は声をかけてね」と知らせるも、そのままスタートし、「前と同じ相手だからもう話すことがない」となることもあった。

4.3.2 一人の持ち時間

当初は一人10分で試みたが、1回目を終え少し長すぎるとのことで、8分にしたところ、ちょうどよいとのことだった。進める中で生徒から出た言葉で一番よく耳にしたのが「話すことない」だった。「そんなことない」と言うってしまうのは簡単だが、その裏には、どういう心理が隠れているのだろうかと頭を悩ませた。結局、前出の図2を前に映したり、生徒との共有フォルダにアップロードして見られるようにし、これを参考にするよう伝えたりすると互いに質問しあい進めていた。

4.3.3 実践者のふるまい

「できるだけ邪魔をせず、空気になる」ことを意識したが、これが思った以上に難しかった。生徒の語りはどのグループも惹かれるものばかりで、あまり近づきすぎると意識されてしまうので、ほどほどの距離で聞こえるように、さりげなく存在する、ということは、最後まで慣れなかった。「もう話すことない」という生徒には内心、「こんなチャンスがあったら、自分ならもっとあれもこれも聞きたいのに」と感じていたが、出しゃばりたい気持ちをぐっと我慢した。また、一度、語り手が答えたくなさそうにしている質問を何度もされているグループがあり、その時は声をかけた。毎回の言葉選びもとても気を使った。しかし、概ね生徒たちは自らでうまく進めており、語り手や聞き手が作り出す暖かい空気のある部屋で過ごす時間はとても心地の良いものだった。

5. 生徒の振り返り

毎回の語り合い直後に提出を求めたひと言感想は、以下のものであった。ポジティブな意見としては「楽しかった」「面白かった」「嬉しかった」「他の人のことを知れた」「共感してくれた」「いっぱい話せた」という声が目立った。その他の意見では「(自分の話の)内容が薄かった」「緊張した」「恥ずかしかった」などが見られた。

2回目以降は、以下の3つの質問に4件法での回答を求めた。

問1) 質問や問いかけができたかどうか

問2) 相手を気遣い尊重する態度で話を聞いたか

問3) 準備ややり取りを通して、自分について気づいたことがあったか

以上の問いに対する回答をまとめた(表1)。

表1 毎回の振り返り結果

	問1	問2	問3
よくできた・できた(問1・2)	87%	98%	84%
あった・少しあった(問3)			
あまりできなかった・できなかった(問1・2)	13%	2%	16%
あまりなかった・なかった(問3)			

質問や問いかけについては、87%の生徒が「よくできた・できた」と回答した。また、相手を気遣い尊重する態度で話を聞いたかについては、98%の生徒が「よくできた・できた」と回答した。そして、準備ややり取りを通して、自分について気づいたことがあったかについては84%の生徒が、「あった・少しあった」と答えた。

問いかけも傾聴も、約9割の生徒が「できた」と実感しており、多くの生徒が前向きに聞こうとしていたことがわかる。「自分についての気づき」については、どういうことが「気づき」なのかわかりにくかったのかもしれない。わかりやすく「あ! そうだったのか!」とはならなかったとしても、

小さな「気づき」があった生徒もいたように、その後の振り返りから感じている。

6. 最後の振り返り

語り合いをすべて終えたのち、レポートという形で生徒からの感想を募った。本章ではレポートに書かれた生徒からの文章を元に、考察を行う。なお授業の開始時に、生徒の発言等については個人が特定されないように配慮した上で公開される可能性があることを伝えている。また、日本語の表記揺れなどが見られるが、生徒の表現を加工せず以下に一部を掲載する。

6.1 自己を振り返る意味に気づいたもの

- ・ 今まで自分のことについて考えたことがなかったので、いい機会だなと思いました。
- ・ そもそも自分について考えることなんてしたことがなかったからどこからどのように考えたらいいのか分からなかった。けれど、考えているうちに自分のことなのに知らなかったことや漠然とできると思っていたことはどこまでできるのかなどたくさんの新しい発見があって面白かったし、自分の自信にも繋がった。
- ・ 自分の過去について考えて話すことが初めてで、自分で過去を振り返るのが、少し恥ずかしいところもありました
- ・ 自分という一人の人間がどのように過ごしてきたのかじっくり話せて恥ずかしい部分や、いじめられていたなどの黒歴史も頑張って話すことができた。
- ・ 振り返ったときに友達と喧嘩したことなどを思い出したのだが、その喧嘩の内容を思い出したとき、そんなことで喧嘩してたのかと自分が情けなく感じた。当時の自分は許せなかったことなのだろうが、今の自分は全然許容できるようなことだったからだ。このことから自分は人として以前よりも成長し、見た目だけでなく中身も大人に近づくことができているんだと気づくことができた。

進学や就職など、進路を決める中でいわゆる「自己分析」などを行ってき

たはずではあったが、自分について考えるという行為を新鮮ととらえる生徒も一定数存在した。とにかく高校生含め我々は日々忙しい社会に生きているので、必要に迫られない限り自分のことは後回しになることも少なくないのかもしれない。しかし、一瞬立ち止まって自分のことを振り返り考えることが、思いがけない効果を生むこともあるのか、と感想を読んで感じた。

6.2 聴き手の存在に注目したもの

- ・ ウンウンとうなずいてくれたり、笑ったりと何かしらの反応をみんなしてくれたので優しい人ばかりだなと思いました。
- ・ 驚いたり、笑ったりなどの反応をくれると、どんどん話が盛り上がったし、自分の思い出が良いものに思えた気がしました。
- ・ 自分の過去のことをみんなに話すのいやだなあ—とっていました。実際やってみると、同じ班の人たちが真剣に聞いてくれたり積極的に質問をしてくれて嬉しかったのを覚えています。
- ・ 少しのことに質問してくれたり、思ってることに共感してくれたりすることで嬉しかったり、自己肯定感が上がった感じがしました。
- ・ 最初は自分の過去のことなんか誰が興味あるんや—とって思ってたけど話してみたら意外なところで質問が飛んできたりしてみんなちゃんと聞いてくれるし少しでも興味を持ってくれてるんや—とあって思いました。
- ・ 誰も自分の話とか興味ないやろ—とか話しても意味ない—とか思っていたけど、実際にグループで話してみるとみんなが真剣に聞いてくれたり、共感やいろんな質問とかしてくれて安心して話せました。やっぱり、はじめは意味があるんか—とか思っても今まで知らなかったこととか知れたりするので、することに意味があるんだなと気づきました。
- ・ 僕は小学校から中学校までずっと虐められて来て、先生にも自分が悪いっていう風に怒られていたので今までずっと虐められる方が 100:0 で悪い—とっていました。でも現代社会クローズアップの授業で自分について語るで話したら皆から色々優しい反応を返してくれたので僕は悪くなかったんだな—とって少し救われました。
- ・ 最初は、こんな感じの話でいいのか、この話をしてみんながどんな反応をするのかな—などと思いながら少し不安な気持ちがありました。ですが、自分についてみんなに話してみると、しっかり目を見ながら真剣に聞いてくれたり、

相槌や「わかる～」などの共感をしてくれました。そして、回を重ねていくごとに、不安だった気持ちもなくなりもっとみんなと話したい、聞きたいと思うようになりました。それは、言葉が詰まると待ってくれる、時々笑ってくれる、といったような話しやすい雰囲気を作ってくれていたからだと思います。

- ・ いざ話すとなると頭が真っ白になりました。ですが、話していくうちに少ななれてきました。それは、みんなの話の聞き方がとても優しく、自分の小さい頃のしょうもない話とかでも「え～！」とか、「それからどうなったの？」などの問いかけをしてくれたおかげだと思います。
- ・ 二回目からはだんだん話しても大丈夫になってきて自分のことを話せた。
- ・ 3回も自分のことについて話すのは正直恥ずかしかったけれど、昔の自分について深く考え絞り出して話していると、みんながいっぱい質問をしてくれるので、自分について思い出しながらやりやすかった。みんなに理解してもらえるのも嬉しいし、自分も懐かしい気持ちになって行って新鮮だった。
- ・ 終わった後に意外やったとか凄いやかゆってもらえて自分は周りからこんなふうに見られてるんだと思うことが多かった。
- ・ 質問などをされるうちに、自分が今まで考えたこともないようなことを考える機会になりました。最初は質問なんてしてほしくないと思っていました。なぜなら今まで自分自身のことを知らない人に話すのは恥ずかしいと思うこともあり、なかなか自分から会話をあまりすることがなかったからです。でも今回の授業で自分自身を詳しく話すことで、私自身を深く知ることができたと思います。

最も目立った感想が、聞き手のやさしさに触れたものであった。「誰が私の話なんかに興味あるねん」といった声については、強く共感できる部分があり、筆者自身も自己開示をする前に一番強く抱いていたものだった。しかし、「これは授業だから、先生にやれと言われたから」というある種の強制がかかることで、話す側も臆することなくこの10分は自分のもの、として話せたのではないかと推測する。

また、全員が1日のうちに話し手と聞き手を経験するという流れだったので、自分がしてもらって嬉しい反応を聞き手のときにしてみよう、ということ意識した生徒もいたようだ。おそらく一朝一夕では傾聴の姿勢は身

につくものではないので、今回「傾聴」と言語化したものは普段生徒が無意識のうちに実行しているものを改めて意識して行ったに過ぎないようにも感じた。

日常では、それぞれがとにかく忙しそうなので、話しかけたら迷惑なのではないか、話しても得にならないと思われそうだと、などと筆者はよく話すことを踏みとどまってしまう。「誰が私の話なんかに興味あるねん」ということは筆者自身が普段でも思ってしまうことなのだが、それを一步超えるといいこともある、と生徒が実感させられた。

6.3 卒業前の実施に意味を見出すもの

- ・ 卒業が近づくこの時期にクラスメイトのことを知れて少し嬉しかったとともに、みんなのこれからのことを知れて進路先でも頑張ろうと改めて思いました。
- ・ クラスの子とは決まった人としか話したことがなかったので、みんなのことが少しでもしれてよかったです。
- ・ 話したことないくても話しかけようと思わなかったけど今まで話したことない人とも話すことができたし、自分がどんな人物かをアピールできた。
- ・ 普段話さないことを話して自分のことを知ってもらえると、いつもより距離が近くなったように感じました。
- ・ 一年間関わりがあったから、自分について深いところまで話すことができた。
- ・ 卒業間近というこのタイミングだからこそ自分も隠すことなくすべてを話すことができました。

この実践の元となった千葉泉先生の授業では、学生たちがほぼ初対面でその授業以外ではかかわりのない人と行うということだったので、同じクラスでずっと過ごしてきたメンバーで行う、ということには少し不安があった。しかし、筆者も学生時代そうであったように、同じクラスで過ごしていたからと言って、全員と深い話をできていたわけではないように思う。そんな中で、本実践においては実施時期を肯定的にとらえる生徒が多かった。「卒業間近」だからこそ「隠すことなくすべてを」話せたという声は、こちらの狙いが当たったという気持ちであった。

翌日からもしばらく一緒に過ごすとなると、どうしても話す内容はより

狭まるかもしれないが、今だけ、という関係性に近づけることで、自分をさらけ出せる状況を作れたのではないかと感じている。

6.4 今後へのつながりを意識したもの

- ・ まだ18年もう18年、これからも自分なりに頑張ろって思った。
- ・ 私は人見知りであり自分からグイグイ話しかけれないので仲良くなった友達としか話さないけど仲良くない子の話を聞くことで共感できて仲良くできるかもしれないから自分がシャットダウンしてるだけでまだまだ仲良くできる友達がたくさんいるかもしれないなと思いました。
- ・ これから社会に出れば、他の人のどんな人なのかを聞くのも大事なんですけど、今回の授業を生かして自分のことを出来るだけ話したいと思います。
- ・ 高校を卒業して進学したら新しい友達ができると思いますが、その時現クロの授業を思い出して、自分を知ってもらえるように自分について話せたりしたらいいなと思いました。

卒業後、同様の状況に頻繁に巡り合うことは予想されにくい。しかし、この授業で体感した「自分について考える」「他者の話に耳を傾ける」という一つ一つの行動が今後何かの時に生徒を助けてくれたらいいなど、ぼんやり感じている。新たな人間関係を作っていく中で、自分なりの距離感とペースで人とかかわり続けることができる、ということを実感してもらえていたら嬉しい。

6.5 複数回の語りあいで感じたこと

- ・ はじめは、みんな緊張してあまり自分から話せなかったこともあったけど、どんどん慣れて楽しそうに話していてとてもいい雰囲気だったと思います。
- ・ 先生たちの話を最初に参考として聞かせて頂いたとき、「自分はまだこんな濃い人生を歩めていないのに何を話したらいいんだろう。」というのが本音でした。みんなの前で話す日になったときも大まかには何を話そうか決めていても、同じ班の子はもっと深い話をするのかなと思って不安でした。でも、初めて話を聞くと周りの子も「あんまり話すことないけど大丈夫？」とか似た気持ちで安心しました。

クラスメイト同士であっても、緊張などで初めからスムーズに進むとは思っていなかったの、やはり複数回の予定を設けていてよかったと感じた。数回目で飽きてしまうのではないかという心配もあり、もちろん幾分飽きていた様子も見られたが、やはりメンバーが変わると気持ちがりセットされていたように見える。何より飽きた様子をあからさまにメンバーに悟られると失礼だしやりにくいということに気づき、真摯に取り組んでいたように見える。グループ数が多く、なかなか個人の語りが3回でどう変化したかまでは追うことができなかったが、雰囲気の硬さは回を重ねるごとに和らいでいたように感じる。また、3人分の教師の語りを聞いたクラスでは、そんな「濃い人生」を私はまだ歩んでいない、と少し委縮してしまったというような声もあったが、素直な感想でとてもありがたかった。高校卒業後はいよいよ多様な道が広がり、選択する機会も次々と訪れる。それまでは自分で何かを決めるということが比較的少ないのでは、という意見のある友人からももらったのだが、そのことを思い出した。やはり大学生以上と語りの内容などは異なるのかもしれないが、そこに優劣は決してないと感じた。複数回の語りの予定があったから、「先生は先生、自分は自分」というように気持ちを持って行っていたように思う。

6.6 少人数だからこそ語ることができるという視点

- ・ みんなの前で発表するのはとても緊張するけれど、4人班だとあまり緊張せずに発表することができました。
- ・ 好きな人、仲がいい人同士じゃなく、普段話さないような人と班が一緒になって、目を見て話ができよかったです。

今回、教室の前で発表という形式ではなく少人数で行った目的について触れているものがあつた。大勢の前でのスピーチという形式が、学校現場ではよく取られる。これが必要なスキルだという意見には反対できない。しかし、不特定多数のイイネを求めて「自分を盛る」ということに虚無を感じている生徒も一定数いるということを経々のやり取りで感じて来た中で、できるだけ飾らず自分をさらけ出すという体験もしてみてもよかった。そこで、互いの目の合う範囲で行えたというのは本当に意味があつたと思う。「あなただから話せる」と互いに判断して自分をオープンにできた生徒

がいることが本当に喜ばしいことである。

7. おわりに

「千葉先生ではなくても語り合いはできるのか」という、問いの答えを探してきた。結果的には、「私にできた」というよりも、語りを担当した教員の皆様協力、千葉先生のアドバイス、ゼミ参加者の皆様、そして何より参加した全生徒のおかげで運よく「語り合いの空間にいられた」といえる。

また、「ファシリテートにはどういうことが重要なのか」について、「自分が肩書を一回脱いで『自分』になる」ことができたことがプラスに働いたのではと感じている。自らの開示は、普段人前で話す仕事をしていても、新鮮でタフな体験だった。いくら肩書を脱いでも、「あなたたちのためにやってあげています」という空気は生徒に敏感に感じ取られるので、「私にとっても皆さんにとっても意味がある、かもしれない」ぐらいの気持ちで気負わずできたことで、硬い雰囲気にはならずすんだのかとも考えられる。こんなこと言っても大丈夫、泣いてもいい、と体を張って示せたのかもしれないが、それも聞き手生徒のおかげだ。

人生のどの段階においても、きっと語り合いは意義のある実践だと感じていたが、日々時間を共にする高校生とでも成立するということが実感でき感無量であった。また対面で語り合うことが難しい状況があったとしても、オンラインなどで同様の効果を得られる実践にも挑戦してみたい。語り合いが苦手な人もいる、ということ念頭に置きながらも、一人でも「やってよかった」「意味があった」「面白かった」という気持ちになる人がいるなら、またそういった場づくりにかかわりたいと強く思う。

参考文献

千葉 泉 2020 『“研究者失格”のわたしが阪大でいっちゃんおもしろい教授になるまで：弱さと向き合い、自分らしく学問する』明石書店。